八戸短期大学研究紀要　第23巻　49～61頁（2000）の抜刷

ベルによる音感教育の増強について

Förderung der Entwicklung des Klanggefühls mit Glocken

附　田　勢津子

ベルによる音感教育の増強について

Förderung der Entwicklung des Klanggefühls mit Glocken

附　田　勢津子

Im Lehrprogramm der Studenten an unserer Schule sind Themen wie allgemeine Musiklehre, musikalischer Ausdruck, Ausdruck der Inhalte der Kindererziehung, musikalische Anleitung von Kleinkindern, Klavierunterricht, und Chorunterricht (Halleluja, andere) enthalten, um die Ausbildung des musikalischen Tonempfindens ständig zu fördern. Jetzt wird noch Musizieren mit Glocken hinzugefügt, um den musikalischen Raum noch weiter auszudehnen. Wir sind sehr dankbar, dass damit endlich langgehegte Wünsche erfüllt werden.

In westlichen Städten klingen am Sonntagmorgen die Kirchenglocken und versetzen mit deren Klang die Menschen in eine fromme Stimmung, welche wiederum in den Menschen ein Gefühl induziert, " als ob man die Stimme Gottes hören würde". Durch die dabei erfahrenen Gefühle von Trost und Rettung werden die Menschen in die Kirche geführt. Hier wird ihnen durch Gebete Ruhe verliehen, die ihnen wiederum die Kraft für das Morgen gibt. Dieser Glockenklang ist Rohform der Handglocken.

In dieser Studie wird die musikalische Veranlagung der Studenten von einem unterschiedlichen Niveau aus musikalisch und pädagogisch im Detail in kleinen Schritten untersucht. Glücklicherweise konnte reibungslos mit den Übungen begonnen werden. Gleichzeitig haben wir den starken Eindruck, dass an dieser Schule grundlegende Fertigkeiten entwickelt und herangebildet werden.

Hier berichten wir nun über vergleichende Studien zwischen den bei den Studenten bereits vorhandenen musikalischen Fähigkeiten und den Ergebnisse nach zwei Jahren Übung.

Ⅰ．序　　文

本学学生の音楽カリキュラムは、音楽概論、音楽表現、保育内容表現、幼児に関わる音楽指導、ピアノ指導、合唱指導（ハレルヤ、その他）、音楽的音感教育の向上を図る教育的展開を日々行ってきた。ここに、ベル演奏活動が加わることにより、より一層の音楽的空間を広げられ、長年の希望がようやくかなえられた事に感謝している。

西洋の町並みでは、日曜の朝事に教会の鐘の音が鳴り響き、聞く人々を敬虔な気持ちにさせ「神の声を聞くような」思いに駆り立てられる。慰められ、救われる思いを体験し、教会に導かれる。祈り、安らぎを与えられ、明日へのエネルギーをもらう。この鐘の音こそ、ハンドベルの粗形である。

この研究では学生の音楽的資質、レベルの異なる現状から、音楽的、教育的に細々と歩み模索した。幸いにも、スムーズに練習活動に入れたことは大変喜ばしく感ずるとともに、本学での基礎能力が培われ、育まれていることを強く感じている。

ここに学生の既に持っている音感能力と、二年間の練習結果を対比させ研究報告とする。

Ⅱ．古代のベル

最初のベルは瓢箪（ひょうたん）の果実の殻（から）で造られ外皮を木片などで叩くようなものだった。金属で出来たベルが造られるようになったのはB. C. 3000年頃で青銅器時代のことだった。人類が初めて作り出した金属は銅と錫を混ぜ合わせた青銅であった。大型のベル（鐘）はキリスト誕生以前すでに東洋で使われていた。(1)

a. 東洋のベル

東洋のベル（鐘）は楽鐘（がくしょう）、陣鐘（じんしょう）警鐘（けいしょう）、時鐘（じしょう）などに分けられていた。

東洋では中国の鐘鐸（しょうたく）形、寺院の釣鐘方が主流であった。釣鐘は、日本にも飛鳥時代（A. D. 592～645）仏教と共に伝わり今日に至っている。

仏教での鐘は、その音を聴く人々に菩提心「悟りを得たいと願う心」を生じさせ、煩悩「心身を悩ませ、悟りの妨げとなる心の働き」を軽くすると言われている。大晦日の夜から新年にかけて、各地の寺院で鳴らされる除夜の鐘は仏教でいう人間の百八の煩悩を、百八の鐘を鳴らすことによりその鐘の音の功徳「恵み、ごりやく」により一つひとつ取り除くことを意味している。(1)

b. 西洋のベル

聖書では、ベル（日本語訳では鈴と訳された）については、旧約聖書のエジプト記の28章、33～35節、同39章、25～26節に記述されている。聖書に見られるベル（鈴）は材質や形状、またその用途もいろいろであった。ベルはキリスト教と密接な関係にあり、特に教会では一つのシンボル的な存在としてベルを鳴らしつづけて来た歴史的経緯が見られる。

西洋ではローマ皇帝がキリスト教を圧迫しなくなった4世紀末頃から、1500年以上も教会はベルを鳴らしつづけてきた。6世紀の中頃には、イタリアの教会の修道士たちが鋳物工場を建てて、小型のベルの他に個々の重さが何トンもある大型のベルを造れるようになった。7世紀初めには、大型のベルは大変な人気でイタリアの至る所の教会で見られた。8世紀頃のイギリスでは定められた時間

にベルを鳴らす習慣が生まれ９世紀～10世紀には、ヨーロッパ中の教会でベル・タワーが見られるようになり11世紀には、ドイツ、スイスの教会でも決められた時間にベルを鳴らす習慣が生まれた。12世紀には、ベルは鋳物工場でいろいろな大きさの鋳型から造られ小型ベル、大型ベルまでかなりの量産ができるようになった。13世紀以降には、ヨーロッパでは独立した町の大部分が独自のベルを持つようになった。東洋のベル（鐘）が仏教との深い関係でその響きがどちらかというと神秘的で「静」であるのに対して、西洋のベルは、キリスト教との密接な関係で勝利を表すベルとして高らかに鳴らす「動」であった。

中世に入るとベルはヨーロッパの各地で見られ、キリスト教の重要性が高まるにつれベルの必要性、役割が人々の生活の中まで実用的に用いられた。ベルは、人々の情報伝達の手段、人の誕生や死を知らせ、外的侵入を告げ、戦いの勝利や敗北を告げる役割も果たした。さらに、朝、昼、晩と時刻を知らせ、朝は目覚ましとして使われ、商店の開店、閉店の時刻を知らせ、火事や洪水などの災害、非常を知らせることにも使われた。歴史的な記念物としてのベルは、スイス北部のバーゼルにあるカテドラル（大聖堂）「平和のベル」（1912年）とアメリカのフィラディルフィア「自由の鐘」（1753年、1976年）などが上げられている。(1)

c. 現代のベルの成り立ち

ベル・リンギング（鳴鐘法）には、一定の振動の様式と技術にしたがって演奏する二つの方法があった。①カリヨンと呼ばれる一組のベルを機械仕掛けによってオルガンのような鍵盤とペェタルで鳴らす方法。②チャイム（リング・オブ・ベル）と呼ばれる一組のベルが主流となり、手で網を引いて鳴らすチェンジ･リンギングと呼ばれる方法が発達した。

イギリスでは1600年頃、タワー･ベル（チャイム）に網を引いて鳴らす方式として、リンギング・イン・ラウンズ（循環鳴鐘法）が知られていた。（ベルを高い音から低い音へと次々と繰り返し鳴らす。）

1600年中頃になると、イギリス人は“チェンジ･リンギング”タワー、ベル（チャイム）を様々な順序にチェンジして鳴らす発見をした。ベルの数が多くなるにつれチェンジ・リンギングの形も、いくつかの規定が加わるようになりピールと呼ばれるチェンジが完成された。このピールと呼ばれるチェンジには、5040通りのチェンジが必要とされ、約三時間鳴らし続けなければならなかった。何百通りもあるチェンジ・リンギングメソットは数学者達によって考案され、音楽的と言うより数理的とも言える独自の方法（数学的規則に従って一組の調律されたベルを作った）で音楽活動をした。また、かなり激しい競争的、身体的活動としても注目された。1673年には、ハンドベルのリンガー達は、ベルを楽しむ集まりとして色々な団体を設立し活動した。（例：古代青少年協会では今でも活動を続けている。）

17世紀から18世紀初めには、色々な枠にとらわれず自由に簡単なメロディーを演奏して楽しむようになり、18世紀後半頃からは、かなりまとまったメロディーやハーモニーも奏でられるようにベルの数も増やされていった。ベル自体も少しずつ改良され、音楽的にも正確に調律された楽器として確立されていった。そして今日、私達が目にし耳にする

天使の音、ハンドベルが誕生した。近年ハンドベルの普及は目覚しく単に協会の礼拝用の楽器としてばかりではなく、普遍的な楽器として教育的にも音楽的にも優れたものとして注目されている。日本のハンドベル連盟は、1976年に結成され現在に至っている。(1)

Ⅲ．本学におけるハンドベルの導入について

1996年シューマリック社・ハンドベル・２オクターブズ（Ｇ４～Ｇ６）（ベル数25）が初めて本学の音楽教材として購入された。その時点では、従来の指導の一環として使用されたのである。

1998年に入り、本学後援会の助成金を得て、シューマリック・ハンドベル・第３オクターブ（Ｃ４～Ｆ＃４＆Ｇ＃６～Ｃ７）（ベル数12）を追加購入した。

さらに、1999年には前年同様に後援会の助成金を受け、第４オクターブ（Ｇ３～Ｂ３＆Ｃ#７～Ｇ７）（ベル数12）を追加導入したのである。総計でベル数は49個となった。これらのベルは専用のケースに入れられ温度・湿度の変化のない状態で管理している。また、同社のベルは随時修理調整が可能であり適切な管理により音質の均一性が保たれる特徴を持っている。

Ⅳ．ハンドベルによる音感教育の実践

A．1998年度における実践活動

練習期間：1998年11月初旬～1999年３月16日

第一回発表：1998年12月19日（土）
クリスマス発表会

参加学生：本学幼児教育学科　９名

曲　　目：DOUGLAS E. WAGNER作曲：
Christmas Carol Fest（2），
福井　幾編著：クリスマス賛歌
メドレー他（3）

第二回発表：1999年３月16日（火）
卒業式発表（セレモニー）

参加学生：本学幼児教育学科　12名

曲　　目：Vincenzo Bellini作曲：
Vaga Luna,che inargenti
（優雅な月よ）（4）

練習時間：練習は毎日二コマ（90分×２）
五週間実施
２月10日～３月16日

ⅰ．実践に当たって

学生の音楽的資質、レベルが異なる現状から練習活動させながら一人一人の個性に合うよう摸索した。先ず希望者を募った結果多数の学生が応募したが、試行の段階であるので特に意欲のある12名の学生で練習を開始した。

幼児教育における、音楽理論、音楽表現、保育内容表現発表、ピアノレッスン指導、ハレルヤ合唱音楽指導を通じて音楽的音感教育の向上を図る教育的展開を日々行ってきた。この基礎的学習の結果から、ベル演奏活動は何の困難もなく、スムーズに練習活動に入れた事は大変喜ばしく感ずると共に、学生達も本学での音楽的基礎能力が培われ育まれた事と思われる。

ⅱ．練習活動の記録

○　クリスマス発表会について

本学におけるベルの本格的組織的導入は初めてであるので、二年生９名の学生によって開始された。しかも最初の導入に当たるので精神的な圧迫を与えないため、記録の提出はさせなかった。

○　卒業式記念演奏発表会について

卒業式記念演奏発表会の練習に当たっては、参加希望者が増えたので、選考の結果学生を３名増やし12名で実施することになった。練習期間は５週間であったが、参加した学生全員に実践経過を記録させた。その実践記録を整理した結果を以下に述べる。

学生の練習の実践記録（毎日の記録より）

＜第一週＞

○　各自のベルの鳴らし方を工夫する。

○　ベルの持ち方、かえ方のタイミングで音の良い悪いが決まる。

○　腕、手、肩、体全体が痛い。（慣れるまで月日を要する）

○　リズム、旋律についていけない。かなり集中力が必要。

○　大きいベルほど体力が必要である。

○　ベルの置き方、並べ方を工夫する必要がある。

＜第二週＞

○　集中力が身につき、耳で聞くことの大切さを知る。

○　自分だけ満足するのではなく、まわりとのバランスを考える。

○　ピアノをしっかりと聞いて演奏すれば、音やリズムのバランスを取る事ができる。

○　急いで焦るとベル同士ぶつかりやすい。

○　リズムが取れない所は不安定になり易い。

○　途中からの参加は集中力に欠ける。

＜第三週＞

○　曲全体の感じをつかめない。音をとめながら鳴らす事が難しい。

○　毎回の集中力が必要である。

○　音楽的ブレスが皆一緒でないと曲の流れがつかめない。

○　音を伸ばしたり、強弱をつけたり、音を切るテクニックが難しい。

○　できるだけ楽譜を見ないで演奏した方が良い結果が出る。

○　手袋をして振ると手が痛くない。大きいベルほど音を切るテクニックが難しい。

○　一つ一つの音がはっきり聞こえるように気をつける必要がある。

＜第四週＞

○　人数が揃わないと曲にならない。

○　健康管理が大切である。

○　ベルの音にハーモニーと音楽的厚みが出てきた。

○　毎日の練習が大切である。

○　日を置くと曲全体のテンポがとれなくなる。

○　慣れてくると間違いやすくなり、リズムが粗雑になる。

○　全身の感覚を集中させる必要がある。

＜第五週＞

○　広い体育館での合奏は音を取り難くさせる。早くなれなくては。

○　周りの音を聞きながら自分のパートを音楽的に表現したい。

○　二列にベルを並べたら音を聞き取れるようになった。

○　全身の感覚を集中させる必要がある。

○　周りの音を聞きながら自分のパートを音楽的に表現したい。

○　隣の人の音だけでなく、ピアノ、管楽器その他の音を聞きながら音をつないで行く必要がある。

○　難しい部分を取り出して練習する事が大切である。

○　録音したテープを聞いたが強弱があまりついていない。

○　テープに録音した演奏は思ったより上手に聞こえた。

○　一年生の前で演奏したが、音が学生に吸収され自分にあまり聞こえてこなかった。

○　音階にそって高くなる音がそろわない。

○　管楽器、ピアノ、合唱と一緒に練習したが、総合的に大変なプレッシャーと緊張感が伝わってきた。体の全感覚に集中力が必要である。

ⅲ．学生による自己評価

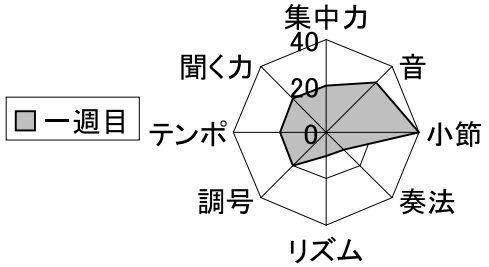
卒業記念演奏会のための練習に当たっては、日々の感想、及び自己評価をさせた。自己評価の項目は以下の８項目について行った。100点満点として自己評価をさせた。

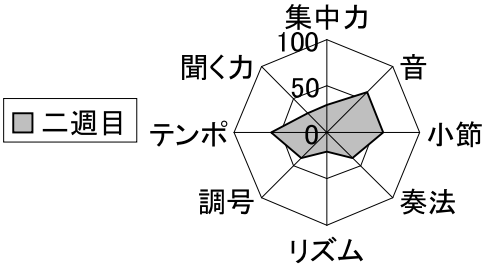
１：集中力　　：集中力
２：音（メロディー）の正確さ　：音
３：小節・拍子の正確さ　　：小節
４：フレーズ奏法の能力　　：奏法
５：リズム理解　　：リズム
６：調号理解　　：調号
７：全体・自分のテンポ　　：テンポ
８：曲全体の音を聞く能力(オーケストラ化)　：聞く力

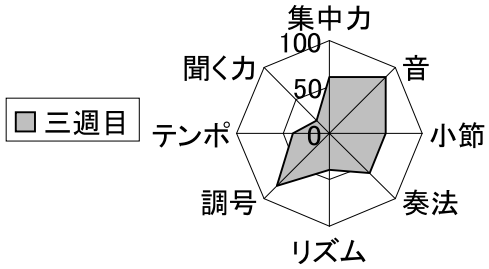
上記の結果は次の表の通りである。

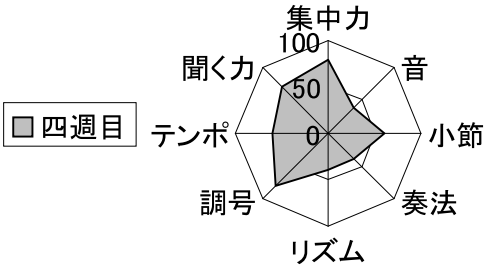
	集中力	音	小　節	奏　法	リズム	調　号	テンポ	聞く力
一週目	20	30	40	10	10	20	20	20
二週目	30	60	60	40	20	40	60	30
三週目	60	85	60	60	40	80	40	20
四週目	80	40	60	40	40	80	60	70
五週目	90	80	60	60	90	80	60	60

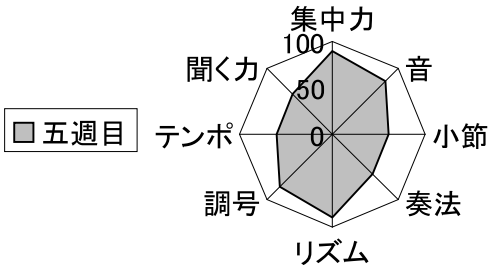
これをグラフ化すると次のようになる。



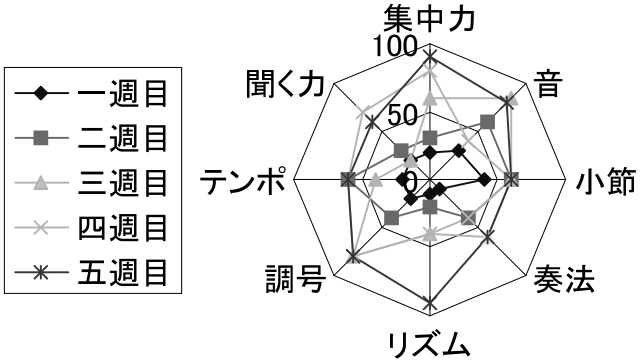








これを重ねあわせると次のようになる。



自己評価の結果を見ると、各週毎に変化していった事がわかる。その主な特徴をあげると、次のようになる。

第一週目：楽譜は読めるが実践技量に欠ける。

第二週目：急に実践行動が見られるが集中力はまだ弱い。

第三週目：一生懸命過ぎて全体の音が聞こえない、フレーズを気にしすぎる。

第四週目：練習人数が少ない（７人）全体の音を聞き取る事に集中し音の正確さを失う、調号理解は向上。

第五週目：小節・拍の正確さは全体のテンポに影響がでる、フレーズ奏法と全体の音を聞き取る能力も同じである。

以上、学生達は毎日楽しく喜んで活動・練習した。週毎の変動としては、第四週目には連日の疲れがうかがわれた。しかし、最後の第五週目には、異常な高まりをみせ結果的には大成功であり、参加した学生も満足度の達成感に溢れていた。

ベーグソン氏の言葉によると、「喜びは同時に炎であり、光である」（６）と語っているが、本学学生の喜びはどのようにして作られ、育てられ、永続性のあるものになし得たか、また美的感情にある感覚の洗練、神経組織の感受性、頭脳の柔軟性等、日日の練習活動の中で見出すことが出来たか、まだ結論に至っていないが、音感教育増強に結び付けられる向上を保育の場で実践し、保ち続けていく可能性を信じ願っている。（６）

A. 1999年度における実践活動

練習期間：1999年11月初旬～2000年３月15日

第一回発表：1999年12月19日（土）
クリスマス発表会

参加学生：本学幼児教育学科　11名

曲　目：DOUGLAS E. WAGNER作曲：
Christmas Carol Fest（２）
福井　幾編著：クリスマス賛歌
メドレー他（3）

第二回発表：2000年３月15日（火）
卒業式発表（セレモニー）

参加学生：本学幼児教育学科　17名

曲　目：Vincenzo Benllini作曲：
Vaga luna, che inargenti
（優雅な月よ）（4）

練習時間：練習は毎日二コマ(90分×２)
五週間実施
２月10日～３月15日

ⅰ．実践に当たって

1999年度は、前年度に引き続き音感教育増強について学生の音楽的資質、レベルが異なる現状を考慮して練習活動を模索した。

1999年度は、さらにベルの音域を広げるために、第４オクターブ（G３～G７：12ベル）を導入し、音の重厚化を図りながら資質向上の手法を試みた。

学生に対する練習内容は、前年と同じであるが、ベルの追加音域の拡大によって音楽的資質向上を目指した。

ⅱ．練習活動の記録

○　クリスマス発表会について

本学におけるベルに対する意識は、前年の先輩の様子を見ていたので、ベルの練習に参加する学生数は多かった。ベルの数が増えたため、1999年度は、２年生11名の学生によって開始された。本年度も自由な音楽空間を尊重し、練習の開始時には精神的な圧迫を与えないため、前年同様に記録の提出はさせなかった。

○　卒業式記念演奏発表会について

卒業式記念演奏発表会の練習に当たっては、参加希望者が増えたので、選考の結果学生17名で実施することになった。練習期間は５週間であったが、参加した学生全員に実践経過を記録させた。その実践記録を整理した結果を以下に述べる。

学生の練習の実践記録（毎日の記録より）

≪第一週≫

○　それぞれのベルの音域を決める。
○　各自のベルの鳴らし方を工夫する。
○　左右のベルの変え方、持ち方を練習する。
○　腕、手、肩、体、全身が痛い。膝を、クッシングしながら力を抜く練習が必要である。
○　大きいベルを持ちたがらない学生が見られる。
○　ベルの置き方を工夫する必要がある。
○　集中力に欠ける。
○　体全体の空間をとり、バランスのよい並び方をする。
○　大きいベルほど体力が必要である。

≪第二週≫

○　出だしの入り方が難しい。
○　ベル同士、ぶつかりやすい。
○　リズムを取れない不安がある。
○　周りとの音、リズムのバランスを考える。
○　時間に遅れない。ベルの鳴らし方を考えたら、音がよくなった。
○　一週目より集中できなかった。

○　同じ場所を何度も間違う。(音が正確じゃない)
○　フレーズがきれいにできてきた。
○　テンポが取れるようになった。余裕がでてきた。
○　曲全体の音を聞けるようになった。
○　音楽が流れるように演奏出来るようになって来た。
○　曲を聞き、自分の音（ポジション）を考えることができた。
○　ピアノを聞きながらのベル演奏はわかりやすい。
○　自分だけ満足するのではなく、全体のバランス（周りの音）を考える。

≪第三週≫

○　学校が寒くて集中できない。
○　音楽的流れはブレスによって決められる。
○　音の伸ばし方、強弱のつけ方、音を切るテクニックが難しい。
○　手袋をして練習したほうがよい。
○　一つ一つの音に対して心を傾けたほうがいい。
○　人数が揃わなく練習にならない。
○　集中力が前回より高まり、全体のテンポがわかるようになってきた。
○　練習の成果が十分発揮されている。
○　ピアノが入ると、拍がわかり演奏しやすい。
○　いつも出席している人はほとんどできているが、欠席者がいつも同じなので練習の意味がない。
○　できるだけ音符を見ないで音に集中して練習したほうが良い結果がでる。

≪第四週≫

○　曲全体を聞けたが、自分のテンポを間違った。
○　体育館での練習でベルの音が分散されると思わなかった。
○　もっと大きくはっきりとベルの音を出さなくてはならない。
○　みんな疲れている。集中力、体力弱し。（健康管理が必要である）
○　今日は人数が少なくて練習にならなかった。
○　練習回数が増えるにつれて、ベルの音がきれいに聞こえる。
○　寒さに負けずに頑張った。
○　音の響きがよくなった。
○　完璧に演奏できるようになった。
○　全員であわせるのも上手になった。
○　ベルの音にハーモニーと音楽的厚みがでてきた。

≪第五週≫

○　３回の練習でピアノ伴奏ができるようになった。
○　ピアノ伴奏だけに集中し、周りの音を聞きながら弾くことができなかった。
○　リズムを取りながら弾くようにしていたが、次第に速くなった。
○　周りの音を聞きながら弾くのは難しい。（オーケストラ化）
○　音の響きをよくするには、体の力を抜きベルを高く上げて鳴らした方が良い。
○　全体の音が聞けてよかった。
○　寒かったけど、みんなとのバランスもきちんと取れ、うまくできた。この調子でうまくいけばよい。
○　一年生の前でリハーサルをしたが、フルート、ピアノ、ベルのブレスのとり方がいま少し練習を要する。
○　一年生の合唱は、主旋律がとてもきれいであったが、二年生のフルートはもっとき

れいであった。

○　緊張して自分の音がわからなくなる部分があった。

○　２列にベルを並べるため、ベルを高く上げ、自分の音を主張しながら演奏した。

○　全員、ブレスとフレーズのとりかたに気をつけたほうがいい。

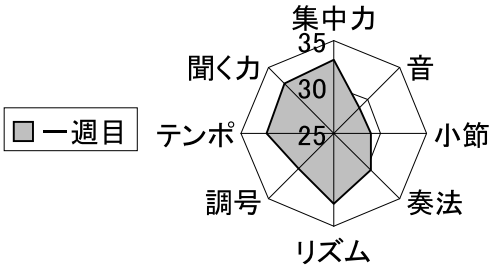
ⅲ．学生による自己評価

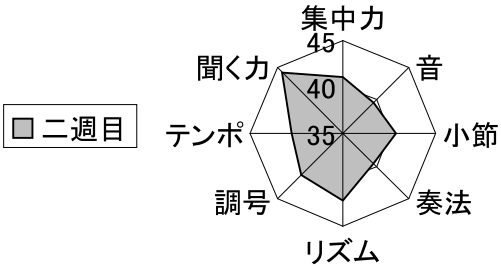
卒業記念演奏会のための練習に当たっては、日々の感想、及び100点満点として自己評価をさせた。自己評価の項目は以下の８項目について行った。

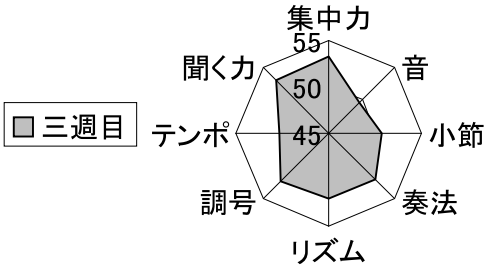
１：集中力　　：集中力
２：音（メロディー）の正確さ　：音
３：小節・拍子の正確さ　　：小節
４：フレーズ奏法の能力　　：奏法
５：リズム理解　　：リズム
６：調号理解　　：調号
７：全体・自分のテンポ　　：テンポ
８：曲全体の音を聞く能力(オーケストラ化)　：聞く力

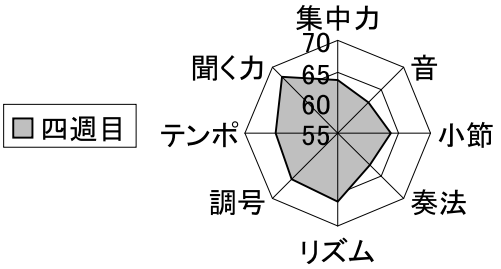
	集中力	音	小　節	奏　法	リズム	調　号	テンポ	聞く力
一週目	33	29	29	30.6	32.6	30.4	32.3	32.6
二週目	41	39.6	40.7	39.6	42.3	41.3	40.6	44.3
三週目	53.3	49.6	50.7	52	52	52.3	50.3	53
四週目	63.6	62	63.6	62.3	66	65.6	65	68
五週目	77.3	73.6	72.6	71.6	76.3	74.3	73.3	76

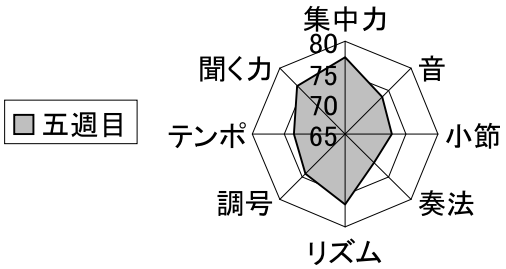
上記の結果は次の表の通りである。



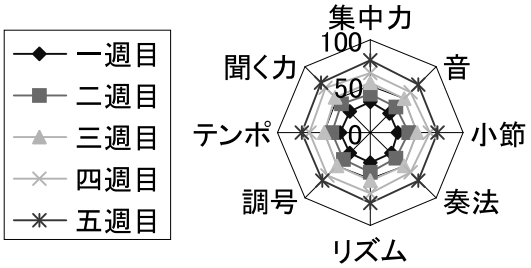








これをグラフ化すると次のようになる。



これを重ね合わせると次のようになる。

1999年度の自己評価結果をみると、1998年度とは若干異なった様子が見られた。各週ごとの主な特徴を挙げると次のようになる。

第一週：音楽的構成要素（メロディー・フレーズ・調性）が視覚的に理解表現しえず、小節のコントロール（一小節先を見る）がうまくいかない。

第二週：読譜力（音のパターンを視覚化）を能率的にコントロール出来ず、ベルに振り回されるため正しく速く読み取れない。

第三週：集中力・聞く力・リズムと広がりが見えるがやはり音楽的構成要素に動きが見られない。（音の認識がテンポに影響あり）

第四週：全体的に向上も見られるが、疲れが出てきてベルチェンジの仕方に苦戦している。

第五週：少しづつではあるが集中力・表現力が向上してきた。リズム感が認識され音楽的構成要素も改善され音楽的向上の実態も見え出した。

1999年度の学生の音楽的資質、レベルが異なるのは例年の通りであったが、数人の学生のリーダーシップにより、学生間の音楽的洞察力が相互に刺激され、共通の音楽目標に到達した。

今年度も、さらにベルの音域を広げて音の重厚化を図りながら資質の向上と手法の開発を試みた。学生に対する練習内容は、前年と同じであるが、音域の拡大によって音楽的資質の向上が見られたことが実感出来た。

以上、学生たちは毎日楽しく喜んで活動し、練習した。週毎の変動としては、やはり前年同様、第四週目に入ると連日の練習による疲れが見られた。第五週目の最後には、急速な向上が見られた。最後の発表では、参加した

学生は満足感と達成感に溢れていた。

V．考　　察

ハンドベルの演奏は音楽的には無論のこと、視覚的にも必然的にグループ全体の動きと一体感が要求される。その結果、聴衆の共感も得られるものである。演奏に参加する学生の自己評価も、目指す音楽的水準（レベル）が高くなるほど厳しいテクニックが要求される。

ハンドベルの練習として、一人一人の能力を引き出しながら自然に表現することを目標とし、次の項目に留意した。

1．音の動向を正しく捉える。
2．全体の音（拍・リズム・テンポのズレ）をよく聴く。
3．直観力・統一性・繊細な音楽的能力の向上を図る。
4．ハンドベルの奏法・音の強弱・テクニックの善し悪しによって表現効果が左右される。
5．曲全体の音質・音色・音量をよく集中して聴く。
6．音楽の流れ（フレーズ）を楽しく表現しハーモニーをつくる。
7．美しさを表現するために各自の音を調和させオーケストラ化を図る。
8．常に協調性をもち、謙虚な態度で練習する。

等を留意しながら音楽的能力と技術を意欲的に育成するように努めた。（1）（9）音楽的構成要素も音楽的成長の過程に築きあげられ、当初目指していた目標に到達することが出来た。

ハンドベル演奏は大変奥が深いので、つい音楽的に厳しい態度で指導してしまう懸念があった。しかし、回を重ねるにつれて、学生達は曲の美しさを楽しんで表現できる小節を見つけるようになってきた。そして、曲が仕上がって行くにつれて不思議に音の調和と心地よいハーモニーが聴かれるようになった。

美しい音楽は、永遠の価値を持っている。学生達はハンドベルの優美で清澄な響きを味わいながら、美しい音のハーモニーを奏でた経験は生涯を通じて、忘れることのない思い出となったはずである。知性と感性に基づいた音楽性の向上は、音楽のすべての面において、少しずつではあるが、熟練し進歩しながら表現力豊かに演奏することが出来るようになった。

二年間のハンドベル演奏活動に参加した学生は、相互の信頼と、豊かな人間愛と、幅広い音楽の知識を十分に生かし、満足感をもって演奏できるようになった。音感増強に関しては、意欲的な音楽活動を促しながら、音楽に対する正しい態度を養い、音楽的洞察力や感受性を育みながら、技術的、感覚的に向上していく姿が見られた。ドナルド・E・アルレット氏のメッセージから、「ベルを正しく正確に鳴らすことは、始まりであって終わりではない」（7、8、9）と言う言葉に大変勇気づけられ、練習活動を続けることが出来た。

ハンドベルの演奏により、音は喜びとなり、炎となり燃焼し、光となり輝き、美のハーモニー（6）として表現され体感された。感覚の洗練、神経組織の感受性および感覚器官の感度の向上は、頭脳の柔軟性なくして音楽的表現はありえない（6）。また、内的な心のハーモニーも生まれない。ハンドベル活動での学生達は、お互いの協力・誠実・信頼を心にとめて練習した。そして、学生達は人間的ふれあいの中で、精神（心）と人格（人間性）の向上を願いながら卒業式演奏会を迎え、大変な満足感と充実感を感じたのであった。この体験は、卒業後の保育・教育現場で十分に生

かされることを堅く信じている。

Ⅵ. ま　と　め

今回の音楽教育に導入されたハンドベルの効果は明らかで、参加した学生の音楽的資質の向上、及び音楽的構成要素の向上に大きな役割を果たした。幼児教育学科にとっては、ハンドベル演奏の技術を習得することは必要不可欠なことであることも確認された。

ハンドベル練習の学習経過を見ると、行事日程的に五週間を設定したことは適当であったと思われる。両年とも共通して、第四週目には練習に対する疲労感が見られ、第五週目には飛躍的な練習効果があらわれた。今回の経験から、ハンドベルの指導期間として五週間が適当であることがわかった。

Ⅶ. 謝　　辞

今回の研究に当たり、光星学院八戸短期大学後援会より1998年度、及び1999年度の二回に亘りハンドベル購入の助成金を賜ったことに深く感謝いたします。また、本学教授高橋政嗣氏にはハンドベル購入時よりご協力いただき深く敬意と感謝を表します。

Ⅷ. 文　　献

⑴　下田和男　著：ハンドベルの魅力　心のハーモニー、共同音楽出版社、 1995.
⑵　DOUGLAS E. WAGNER作曲：Christmas Carol Fest、Agape社、 1988.
⑶　福井　幾編著：　MUSIC　BELL　合奏曲集（改訂版）、サーベル社、 1995.
⑷　Vincenzo Bellini作曲：15　Composizioni Da Camera Per Canto e Pianoforte、RICORDI社、 1988.
⑸　James L. Mursell　著（美田節子 訳）：Human Values in Music Education「音楽教育と人間形成」、音楽之友社、1967.
⑹　エミール・ジャック＝ダルクローズー著（板野　平　訳）:「リズムと音楽と教育（リトミック論文集）」,全音楽譜出版社、1975.
⑺　Donald E. Allured著：Joyfully Ring、Broadman　Press　社　1974.
⑻　Donald E. Allured著　（下田和男　訳）：Joyfully　Ring「ハンドベルリンガーズと指導者のための手引き［初級編］」、共同音楽出版社、 1993.
⑼　Donald E. Allured著：Mastering Musicianship in Handbells、Broadman Press　社、 1992.